

## 2017年 アヴィニョン演劇祭参加報告

2017年8月 花柳 衛菊

直径1.2kmの城壁に囲まれた旧市街で行われるアヴィニョン演劇祭は、7月の3週間、南仏プロバンス・アヴィニョンで開かれる世界有数の舞台芸術祭で、イン、オフ公演から成り、インの演劇祭主催公演には50ほど、一般参加のオフ公演には世界中から1400程のカンパニーが参加しています。私は1997年からエディンバラ等の海外演劇祭参加公演を毎年続け、アヴィニョン演劇祭オフ公演では2001年から17年間連続で、2週間の公演をしています。

連続13回のアヴィニョン演劇祭参加公演終了2日後、パリに立ち寄り、パリ在住のダンスを中心に多分野で活躍されているO氏のフォンテンブローの館に招かれた。緑豊かな庭の青い小さな実がたわわな、ロココ調の広いスカート状のリンゴの木の下には、まめかしい淑女の足のような幹に支えられたテーブルがあり、ワイン、テリーヌ、魚の炭焼き、クスクスサラダが並び、心地よい涼風を楽しみながら、連続公演の疲れがフーッと消えていくような至福のひとつときに身を任せた。リンゴのスカートは地面まで届き、まるで秘密の小部屋で密談をしているようだ。リヨンの国立バレエ団のソリストとして活躍していた、Kさんも招かれ、アヴィニョンのこと、日本やフランスの公演事情、ダンスの話に話が弾み、このような心おきなく充実したお付き合いをさせて頂けるのもフランスに17年間通い続けることができた成果だと、その年月の有難さが身に沁みた。リンゴの部屋の外には、完熟あんずがポトポトと地面に落ち、畑にはトマトやゴボウたちが我が物顔に葉を広げ、可愛らしいまだ固いぶどうが塀をおおい、のびのびと嬉しそうな木々たちが風と共に語りかける。ラグジュアリー、幸せという言葉がびったりな、なんという心地よい時間だったのだろう。



2日後の帰国の日、ルーブル博物館の一角にある装飾芸術美術館特別展、クリスチャン・ディオールのメゾンが設立されて70周年を迎えることを記念した「クリスチャン・ディオール、夢のクチュリエ」展を見た。来年1月までの開催にもかかわらず1時間待ちの大人気で、前日ガリエラ美術館で見た歌姫ダリダの着用した衣裳、ドレス200点を展示したひっそりとした落ち着いた雰囲気とはうって変わったむんむんとした熱気に満ちていた。ダリダの舞台、映画、日常を着飾る衣裳とはどこか違う緊張感あるディオールメゾンの作品に心打たれた。ダリダの衣装たちとほんの少しの違いがディオール作品にはあり、その違いは何なのか。ダリダもディオールメゾンも美しいライン、職人技 センス、ロマンティズム、エレガンスにあふれているのだが、ディオールメゾン作品には、どんな落ち度も、未完成も許さない、という厳しい視線と、特に初期作品は自然であることと抜けたような



新しさを併せ持ち、服たちを、柔らかな改革にあふれた芸術品にしていたように思う。花が大好きだったディオールを彷彿とさせる白い花の部屋には、花をモチーフとした白やピンクの服が飾られている。20m×10mと10m四方ほどの繋がったいびつにカーブした白い部屋には、コピー紙のような薄い白い紙を切り抜いた無数の藤の花と葉、名前はわからないがかわいらしい

花とその蔓と続き、そして最後には白い薔薇と葉が、びっしりと天井、壁を埋め尽くし、花をイメージした服たちを浮かび上がらせる。白い花たちは自己主張し過ぎず、かといってしっかり満ち足りた空間を作っている。この花園を作るのにどれほどのアイデアと人と時間と費用が注がれたことか、その美と贅沢感に酔いしれた。芸術とは神の創造物に限りなく近寄りながら創作者の痕跡を残すことなのだろう。

そして、3時間を過ごしたディオールメゾン展に別れを告げ、ルーブル宮の横のビボリ通りを歩きながら、このパリ、そしてフランスについて考え込んだ。リボリ通りには観光客相手の安価なお土産屋が並び、アル中の物乞いが缶をさし出しプリーズプリーズとよろよろと歩く。そしてリボリの一つ向こうはシャネル、グッチのブランド店が並ぶサントノレ通り、サントノレ通りを乗り越したすぐが、ショーメ、ホテルリッツ等の世界最高峰の高級店が面するヴァンドーム広場。ほんの歩いて1~2分程の距離で数百円のお土産から何億のティアラまでを垣間見ることができる。それぞれの領域が、重なることなく背合わせで整然と自分の場所を主張している。これが千年の歴史というものだろうか。その落差、明と暗、ピンからキリまでが隣り合わせで不自然でなく存在するその厚みがパリ、フランスの魅力なのだろうか。

地下鉄1号線に乗り、メルキユールホテル・ガレドリヨンに置いてある荷物を拾ってシャルルドゴール空港まで行かなければならない。今日これからは交通機関に身を任せ、長い待ち時間を過ごさなければならない。17日間を過ごしたアヴィニオンを思い起こすのにはピッタリだ。

シャルルドゴール空港のゲートで23時25分発のエールフランス機の搭乗を待ちながら、アヴィニオンで見た公演の数々を思い出していた。驚くべきことに、この17年間、通い続け見続けてきたアヴィニオンのダンスは実は刻々と変わり続けている。2~3年で風潮ががらりとかわるのだ。数年前は暴力、激情などと表現されていた、床に体をたたきつけ、お互いに殴り合い、物を破壊するダンス。ホースで大量の水をダンサーにあて、そのもどえる様を見せるものもあった。歩くことが主軸の年もあった。単調な繰り返し音の中、20名程の白人、黒人、黄色のダンサーが全裸で30分歩き続ける。後ろの壁から出ては入りまた出てくることの繰り返しだ。また、ここ数年はヒップホップが大流行で、2年ほど前に私が見たダンスの半数以上はヒップホップだった。観客はその超絶技巧、スピード、細胞の一

一つ一つを動かすことができるような黒人たちのダンスに歓声を挙げていた。均整のとれた全裸の姿も筋力もリズム感も黒人ダンサーは素晴らしい。しかし、不思議なことに、今年、私が見た限りでは純粋なヒップホップが一つもない。彼らはどこに消えてしまったのだろうか。今年、心臓の鼓動が聞こえてきそうなほどゆっくり動くことと、延々と同じ振りを数名で繰り返しながら少しずつ乱れていくのが流行のように見えた。まるであなたも私も踊れるダンス、ダンスは特別なものではない、と言っているようだ。Tシャツにジーンズやワンピースなどの普段着です、技巧的ではない、観客と同じ目線で、夢を売るのではなく今の現実を直視し、着飾ることはなく、虚飾をはいだ生の自分自身をさらけ出すダンスだ。

パリオペラ座バレエのように美しさの追及が極限に達した時、人々は才能があり、美貌とスポンサーにも恵まれたほんの一握りの努力家のダンサーのみに許された、究極のダンスに疑問を持ち、体の固い人も足が短い人も、太った人も年を取った人も、お金がなくても訓練すれば誰にでもできるが決してシロウトダンスではないダンスの模索を始めた。そしていき着いたのが今年いくつか見たダンスなのではないかと思った。あるイン（フェスティバル主催）の公演は、日常性の中の人間を見直す作業であった。虚飾をはいだ生身の人間をさらし、その内面に迫る。高貴でもなく品格が漂うわけでもなく、人間の本来のなまましいありのままの普段の姿を新しい技法で追及する。そこには研ぎ澄まされた技術や形も、美しく矯正された肉体も、動きのラインを助ける衣裳も排除される。ダンサーは自分が持っている高度な技術を振りかざすことなく、振付家、演出家を信じてひたすら全員で体力が続く限り、繰り返しのダンスを踊る。そこに技術の優劣は存在しない。カウント把握に懸命な人々がいるのみである。観客も自分と同じような普通の人々が自分にもできるダンスを踊っている、まるで自分の家から隣を覗いているような安心感で舞台を見つめる。そしてその繰り返しのダンスに少しのずれが生じてくる。一人ずつパターンダンスから離れ服を脱ぎ捨てていく。男と女、老若、生身の体が露骨に視界に入ってくる。人は、Tシャツにジーンズの時は同じように見えても、裸になるとこんなに違うんだ、と見せているようだ。バラまかれたスナック菓子を拾って食べたり、爆竹があちこちで破裂したり、撒かれた水にすべったりしながら、いつしかそれぞれの人々は裸のままそれぞれの個性を表現し始める。皆違う、それでいいんだ、違う事こそが人間なんだ、違っても共存していかなければならないんだ、という強烈な平和への願いがあぶりだされていく。全ての公演にはダンス、人形劇等、公演の分野が記載されているが、フランス在住のダンス批評家がこの共存のメッセージを伝えるために、この‘ダンスそのもの’のような公演を、敢えてテアートル（演劇）としている、と教えてくれた。アヴィニオンではドーンズ（ダンス）という抽象的な表現という印象があるようだ。この公演は抽象ではなく、メッセージをはっきり持った公演ということらしい。私はいつも感動した公演を2回は見るようにしているが、その演劇ダンスをもう一度



私の今年の一押し公演は「PARALLELES」

見たいとは思わなかった。しかし今年のアヴィニョンの方向性をしっかりと感じ取ることができた。大いなる平和への願望と芸術の開拓。昨年はフェスティバル開催中、近くのニースの殺傷事件で演者も観客も落ち込み、暗い空気に包まれたフェスティバルであった。そのことが今年作品に影響を及ぼしているのだろう。観客たちは全員総立ちでブラボーを叫び続けた。

その帰り道、自分の心は満たされていないことに気付いていた。自分が求めているものとは違う価値観の世界だ。何か別のものが見たい、と厚さ2cm程のA4の重い全1400公演プログラムが載る冊子をめくり、あらかじめチェックしておいたシャンソン公演に行くことにした。ピアノ奏者と男性歌手2人の公演で、30名程しか入らない、私の公演するシアターと同規模の劇場だ。彼は淡々と、技巧を駆使して歌い続ける。長い歴史とそして訓練に裏打ちされた確かな技術。観客は少ないが確実に聞きたくて来ている人達だ。このシャンソンも民衆からにじみ出た歌なのだが、そこに時間の厚み、人々の創意工夫が加わり、薄い絹のジョーゼットに包まれたように柔らかい、そして時にベールを剥ぎ棄て激しい激情の芸術となった。終演後、心地よい感動に包まれ、夜11時過ぎに徒歩1分の我が家のアパートマンに帰り、気持ちよく寝入った。自分の家から徒歩15分圏内ではほぼ1400公演すべてが網羅できる。試行錯誤の末たどり着いた先端作品と、技術なくしては表現できない歴史に裏付けられた作品が入り交じり、それらが全て参加カンパニー独自の作品なのだから、アヴィニョン演劇祭は本当におもしろい。

舞台芸術には表現するものと鑑賞者が必要である。ここアヴィニョンでは公演は2つの種類に分けられると思う。演劇作品は言葉が難しく、自分の公演終了後に鑑賞する30~40の公演のなかでも1つ位か。私の鑑賞するのはダンス、人形劇、マイム、音楽などである。ほとんどの音楽、マイムは観客を巻き込み、観客に語りかけ、手をたたかせ、お客を舞台に呼び出し演者と観客は交流をする。

そしてそれとは一線を画するのが演者と観客を厚い壁で仕切ってしまう公演である。そこ



公演前の我家での稽古

では、観客は、見た事もない価値観、技術、感性、美、自分とは違う世界が広がることに身を乗り出して鑑賞する。観客のすぐ足元から舞台である。最前列にすわると演者と接する場合もあるほどだ。そんな間近な公演でも、演者と観客がはっきり分けられ、演者は観客とは離れて遠い世界にいる。演者は自分の世界に没頭し、観客は置いて行かれないように演者を見つめる。演者に照明が当たり、客席は演者からは真暗闇なので、演者は観客を意識せず自分の世界に浸りきることができる。観客を拒否し、

自分の価値観を押し付け、迷いなく自分を空間に浮かび上がらせる。このことこそ私がア



ヴィニョンで演者として生き残る大切な一要素のような気がする。海外で公演をする日本人は、観客を巻き込むこちらのやり方を取り入れる人が多いが、私はそれを見るときなぜか鼻白んでしまう。能で代表されるような演者が自分の世界にひたり、客席とは別空間を創る、観客に迎合することなく、厚かましく自分の世界感を押し付ける、ことがここでは必要のように思う。

私が公演をするのは、簡素な美しくはない黒幕に囲まれた、仮設劇場のガレージシアターだ。雪女と月恋は照明を暗くして、暗い中に自分だけが浮き上がるようにした。すべての振りを、無駄なく、力を抜くことなく、流すラインを注意深く踊り切る事。自分の踊りの事のみを考え、迷うことなく乱れることなく自己主張すること。55分間のソロ公演で、しかも3枚の着物を自分一人で着替え、後見の山形さんがセッティングをしてくれる時間を除けば踊りっぱなしである。実は、迷うことなく乱れることなく…は非常に難しい。しかし、ここアヴィニョンで自分の生きる道は‘迷うことなく、乱れることなく、自分の世界を押し付ける’それしかない。長い年月で培われた、観客を巻き込み、観客を沸かせるありとあらゆる技術を彼らは持っている。こちらでは、演じるとは観客を楽しませることから発しているのだろう。日本のように祈りからにじみ出たものではないのだと思う。



スタッフのデイビッド  
後見の山形さんと  
開演前に

ディオール展のドレス達は、自分とは別世界の服たちだ。自分がこのような服を着ることはありえない、このような服を着る場所は、映像の中や、レッドカーペットの上のみだろう。私が存在する日常では決して出会わない服たち。私の世界とは全く相いれない服たちは毅然として私を見降している。だからこそ私は服たちから目をそらすことができず、じっと凝視してしまうのではないか。美しい人のみが着ることを許される夢の中の美術品のようなドレスと、白い部屋にびっしりとつまった白い花たちが作り出す濃密さと優雅さは、私の世界には全く存在しない。だからこ、その魅力に吸い寄せられ、魅了されてしまうのではないか。私の目指すアヴィニョンでの公演とディオール作品がおこがましくも重なった。

パリでの最初の夜のO氏亭からの帰り、9時18分のRER列車をホームで待っていたが、待てど暮せど1時間に1本の列車は来ない。駅舎には鍵がかかり駅員は誰もいない。かすみさんがホームにいる男性に問いかけたところ、どうも今日は9時以後の列車は工事のため運休らしい、と言う。反対側ホームの小さな掲示板にA5程の印刷紙が貼ってあり、代行バスの時間が印刷されていた。その印刷物は暗い中、目を凝らさないと見えない。そして30分待ってバスに乗り、1時間で帰ることができるはずが、3時間かかって真夜中のガレド

リヨン駅に着いた。往きの列車の中でも、乗り込んだガレドリヨン駅でもそのようなことは注意されない。日本では許されることのない怠慢。日本は、街並みは安っぽく、文化や歴史の香りがしないが、それに目をつむれば何と住みよい国なのだろう。バスでフォンテンブローの森を抜ける時、イノシシがバスの前を横切ったり、美しい教会のある可愛らしい町を通ったり、Kさんとの会話もはずみ、時間に制約のない旅行者には思いがけない楽しい3時間であったが。

研ぎ澄まされた感性で構築されたA級の美と最先端、D級の日常的対応。これがフランスの魅力なのだろうか。

正当性と自己主張、最高の美への感性と高い技術が混在し、文句なく美しいA級の、時代が変わっても忘れられ、すたれることのないディオールメゾンの作品。そして気付いた。今までディオールメゾン作品について論じてきたすべてを、日本の着物が内蔵していることに。ディオールの刺繍、スパンコール、ピントックなどのテキスタイル（布地）からの服作りは着物の布作りと酷似している。友禅、唐織、大島紬…、決して勝るとも劣らない。布地を生かす着物の形は洗練の極みである。帯や帯締めなどのコーディネート、着方など多くの工夫が着物には内在する。何という豊かなA級文化を我々は持っているのだろう。



城壁に囲まれた美しい古都アヴィニョン

ラグジュアリーluxury 豪華・贅沢・快適 は日本にもしっかりとあったのだ。

創作とは、ともすれば、いまだ未完成ということだ。これから時間をかけて本物へと移行する可能性をはらむ。ここアヴィニョンの1400のオフ公演はどれも、信じられない程の密度と完成度を併せ持ち、さらに公演を重ねながら自分たちの公演を育てている。自分がここアヴィニョンに17年も通い続けるのは、彼らの創作へのエネルギーと情熱をもらうためと、自分の作品を少しでも向上させるためだ。残念ながら、日本には自分のように、日本舞踊を基に踊りを創る活動している者を受け入れ、育ててくれる場所はない。自分が自分を育てる、そのために何という素晴らしい場所を神は提供してくれているのだろう。アヴィニョンフェスティバル 万歳！

私の公演するのは二十数席しかないガレージシアターであるが、毎日ほぼ満席だったのが本当に有難かった。渡仏中、フランスでの二つの公演の話が浮上した。これらが実現するよう努力したいと思う。

フランスまで同行し公演のお手伝いをして下さったのは、花柳奈舟さん、高橋広美さん、高木登美子さん、そして後見の山形佐登子さんです。心から感謝申し上げます。

## 花柳衛菊日本舞踊公演 Egiku Hanayagi Danses Japonaises

2017年7月14日～26日 13:00 Garage International Theatre



葉書サイズのチラシ、表裏

### 公演プログラム

#### 雪と月 La Neige et La Lune

雪女 Yukionna La Femme de la Neige  
La nuit de la neige  
une femme vient chercher son enfant

我が愛し子を  
いま一度胸に抱きたし

祭 Matsuri La danse folklorique du Japon

Ayakomai 綾子舞

Ayadake 綾竹

月恋 Getsuren Sur la Pleine Lune de la Nuit

満月の夜に